

広報

なんせい

第29号

発行 南西糖業株式会社 編集 総務部
〒891-7621
鹿児島県大島郡天城町兼久高約2337
Tel 0997(85)3125 Fax 0997(85)3129

さとうきびの V字回復を目指して



徳之島さとうきび
生産対策本部長
森田 弘光

新年明けましておめでとうございませう。皆様におかれましては、健やかな新年をお迎えしていることとお慶び申し上げます。

さて、徳之島の農業の現状は高齢化並びに戸数の減少が加速し、抜本的な活性化対策が重要だと認識しております。

さとうきびは、徳之島の基幹となる作物で、製糖工場や輸送関係を含めた地域経済効果は生産量の4倍とも言われ、欠くことのできない産業でございます。特に今年度産は台風干ばつ被害もなく全般的に気象に恵まれ、量質共に回復基調にあるものと期待致しております。

徳之島さとうきび生産対策本部では昨年、関係機関のトップを募集して「さとうきび勉強会」を開催

し、さとうきびの生産振興に関わる課題並びに対応策を集約し、毎月の企画運営委員会では振興方策を継続的に協議施策しているところでです。

具体的には昨年発動されたセーフティネット基金と国の補正事業を活用し、2月から始まる春植えと収穫後の早期肥培管理作業の徹底を推進し、収穫面積の確保と増産に繋げていければと考えております。また、新規奨励品種の試験やスクープ、ビレットプランターなどの新しい省力化機械等の導入促進、受託作業組織の充実、拡大傾向にあるイノシシ被害の防止対策など、将来にわたりさとうきびが安定して生産されるよう取り組んで参ります。

農家の皆様におかれましても、お体には十分留意され、各種補助事業等を活用しながら春植推進に努めていただきますようお願いいたします。

おわりに、本年が皆様にとって幸多き年となることと、徳之島の農業がさらに発展することをご祈念申し上げます。挨拶とさせていただきます。

新年のごあいさつ



代表取締役社長
田村 順一

新年明けましておめでとうございませう。皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

さて昨年は気象災害が比較的軽微で、さとうきびの予想平均単収は5.4ト、糖度も過去2年に比べかなり回復する見込みで、農家の皆様はようやく安堵されたことでしょう。

さとうきび農業は直近の8年間で平均単収5トを下回る年が6年と厳しい状況にあります。私は国会議員や行政の姿勢に、離島の砂糖産業を守るうとの本気度を強く感じています。気象災害から農家を守るセーフティネット基金は来年度も継続が決まり、10月には病害虫対策として迅速に発動されました。また年末には来期のさとうき

びの交付金単価引き上げが決まりました。これで2年続けて引き上げられ、「さとうきびの価格は上がらない」との農家所得向上を妨げる壁が崩れてきています。

弊社も皆様をバックアップしてまいります。今期の収穫量は17万トと見込まれ、経営的には厳しいですが、来期に向け皆様が付付けや管理作業を適期に行えますよう年内操業を決めました。また農家の担い手不足に対処すべく、ハーベスター収穫苗をビレットプランターで植え付ける、主に大型農家向けの一貫機械化の目的を付けました。一般農家向けには小型トラクターを活用したミニプランターを開発し貸し出してまいります。

弊社は今後も関係機関と連携し、単収向上と収穫面積の回復に役割貢献し、2工場を維持することで徳之島の経済と社会の維持発展に貢献してまいります。末尾となりましたが、今年1年、皆様が健康に過ごされ、幸多い年となりますよう心からお祈り申し上げます。

品種のおはなし

今回はさとうきびの品種についてこれまでと少し変わった視点で紹介します。

これまで徳之島にもたくさんのおさとうきびの奨励品種が提供されてきました。今私たちが栽培しているおさとうきび(実用品種)のほとんど

高貴種



石垣島の野生種の保存圃場



どは、19世紀ごろまで商業的に栽培されてきた「高貴種」と呼ばれる、太く砂糖を蓄える遺伝子能力を期待される種と環境適応性、耐病性などに優れた野生種の2つの種を掛け合わせ、そこから生まれてくる優秀な子供たち同士を交配を繰り返すことで品種が選抜されてきました。その結果、いろいろな品種が登場してきて、その祖先をたどると結局は二つの原種にたどり着くという点では遺伝的には狭い範囲にあったという意外な話です。

さて、同じように遺伝子の広がりを探るといって、品種改良の現場では先に登場した実用品種の始祖種である野生種の代わりにサトウキビの近縁野生種である「エリアンサス」という別属の植

物を交配に使うという取り組みも始めています。このエリアンサス属植物はこれまでの野生種に比べて根部の発育が極めて旺盛で生育と干ばつ耐性に優れた品種を生み出す可能性が広がると言われており、今後の優秀品種の登場に期待です。

気候と上手に付き合う栽培管理について

さとうきびって普通に作れば単収5トン位はあるはずなのになぜ単収の低い畑が多いのでしょうか。きつちりとすべてを理想通りするのはこの高齢化・人手不足の中では難しいということになるのかもしれないが、ここでは「気象を味方につけて! どうせするなら早く!」という話をさせていただきます。

まずは秋に掘り返したさとうきび(写真①)をご覧ください。驚くことにさとうきびはこの段階ですでに萌芽を始めて、翌年のスタートを切っています。一方、ハーベスタで収穫して長い間放置した株を掘り起こしてみると写真②の様になっています。切り口は腐食し生き絶え絶

えといった状態になっていることがわかります。収穫後そのままにしておくとしゅくじユクした土の中でハカマを被り、日照も届かない状態で放置されることとなります。そ

写真②



写真①



さとうきびとエリアンサスの交配



生育旺盛な石垣島のエリアンサス





写真③_8月上旬植付



写真③_10月上旬植付

のような株が寒い時期を乗り越えられずに死滅して欠株となったり、病弱な生育のまままで生育不良や分けつ不良になつてしまつたりするものもこの写真を見ると頷けます。

さとうきびは熱帯の作物なので低温には弱い性質ですが、それでも**収穫直後に排水しお礼肥を与える**だけで、元気な状態でこの寒い期間をしのいで暖かくなるのを待つことができます。寒い期間に根を張り、芽を起こしていく手助けをしてあげることで暖かくなつた時の生育の勢いは各段に違つてきます。

どうせしなければならぬ管理作業です。早くするといふだけでコストが増加するものではありません。それどころか、その後の除草作業などの手間やコストを抑える効果も期待できるので、できるだけ早く作業を行います。『**収穫直後の**』

だけ早い管理作業の開始、これをしっかりと実践していきたいものです。ちなみにスタートの重要性は写真③でもよくわかります。同じ夏植えでも、植付時期が8月上旬と10月初旬では、12月中旬時点での生育状況にこれだけの違いが発生します。これが、気温という環境を整えただけでの生育の違いが目に見えるいい例だと思えます。

さとうきびは1年という限られた期間で収穫する作物なので**有効な1〜2ヶ月の生育期間をどのように利用するかで大きな単収の差となつて現れます**。「夏の暑い気象を利用すること」「春の暖かい時期のスタートダッシュを確実にすること」、同じ作業量とコストを使うのであれば自然の力をできるだけ効率よく使うことを心がけましょう。特に春の繁忙期は時間のやりくりが難しいです。

すが、うまく乗り越えれば次の収穫が楽しみになります。

**新ジャンプ会
視察研修**

新ジャンプ会はさとうきび生産量1,000トを超える若手の大型農家を筆頭に**35組織が参画する徳之島のさとうきび産業の担い手組織**です。

毎年数回の営農研修や栽培の勉強会を開催してありますが、その研修の一環として、先進技術や組織管理の運用事例等の視察を目的に島外での研修も実施しています。今年も夏植えの時期が終了した11月に2泊3日で九州各地を視察しました。

鹿児島県経済連主催の農業機械展示会を見学した他、福岡県に肥料工場がある住商アグリビジネス(株)で肥料製造の視察と土づくりなどの情報収集、さらには自分たちが生産したさとうきびが消費者に砂糖製品となつて届くまでの過程を三井製糖(株)福岡工場で見学できたことは貴重な経験となりました。



住商アグリビジネス(株)での研修

工場では厳重な品質管理の為に、ガラス越しではありましたが、3ヶ月分の原料糖が山積みされた倉庫から、製造ラインを通り精製され、白糖に生まれ変わっていく経過を目の当たりにすると国内自給率の一端を担っていることが実感できました。12月からは国内産のさとうきびの収穫が始まり、徳之島をはじめとした南の島々から国産の原料糖が続々と運ばれ、精製された後消費者の下に届くこととなります。

ジャンプ会のメンバーからも、**自分たちの営農活動が国内消費者の食生活を支えている**ことを肌で感じる事ができ、とてもいい経験ができたこと好評でした。

工場便り

弊社では平成27年の採用より新たに、中途採用枠を設けることで、多くの**若手社員が誕生**しました。そこで、若手社員の育成を図るため東京で新人研修を行つたり数多くの資格試験・技能講習を受講させたりなど、若手社員のキャリアアップに積極的に取り組んでおります。

若手社員の増加により、ますます輝きと情熱が増していく一方、創業54年で培われた技術を大切に、今製糖期も大切なさとうきびを1本たりとも無駄にせず、搾らせて頂きます。



ネットワーク研修を受講する若手社員

今期の製糖計画

キビ処理見込量	16万8,739ト	
製糖開始日	令和元年12月19日(木)	
年内搬入終了日	令和元年12月25日(水)	
年明け搬入開始日	令和2年1月7日(火)	
工場 休 止 日	年未年始	令和元年12月26日(木) ～令和2年1月6日(月)
	春植推進日 (予定)	①令和2年2月3日(月) ～2月5日(水) ②令和2年3月4日(水) ～3月10日(火)
キビ搬入終了予定	令和2年3月30日(月)	

工場からのお願い

工場に運ばれるさとうきびは約99%がハーベスターで収穫されています。空き缶や鎌などの金属類がハーベスターに入りますと、ハーベスターの刃を傷めるのはもちろんのこと、そのまま工場に持ち込まれると工場の機械も傷めてしまいます。場合によっては、工場を長時間停止して修理しなければなりません。工場を安定操業させるためにも、空き缶のポイ捨てをしない

ことや収穫前に園芸パイプの撤去をするなど、金属類の混入防止にご協力をお願い申し上げます。



新役員体制

弊社第54回定時株主総会並びに取締役会におきまして下記のとおり役員が選任され、それぞれ就任いたしました。

つきましては、今後とも社業発展のため一層精励いたす所存でございますので、何卒倍旧のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

代表取締役社長	田村順一
常務取締役	新高美薫
取締役	新高垣建志
取締役	高池崎左地
取締役	松山洋次郎
取締役(非常勤)	伊藤哲也
取締役(非常勤)	平田昭夫
監査役(非常勤)	益田幸直
監査役(非常勤)	三浦直貴

なお、取締役 大久武信は、本総会をもって退任いたしました。在任中、賜りましたご厚情に厚く御礼申し上げます。

HP更新のお知らせ

当社ホームページではブログや採用情報その他、過去の「広報なんせい」等もご覧になれます。直近の更新では、製糖期関係の情報や会社紹介の動画を掲載しました。

興味のある方はぜひ下記URLまでアクセスを↓↓

<http://nanseitg.co.jp/>



(会社紹介動画より)

新役員紹介



取締役農務部長
松山 洋次郎

私は昭和61年4月に入社以来、3町の原料事務所での勤務等、農務関係を中心に33年勤めてまいりましたが、先般の株主総会に於きまして取締役農務部長に就任いたしました。

生産量は平成1/2年期、史上最高の36万9千トンを記録して以降は下降の一途を辿っており、収穫作業においても手刈りから機械収穫へ移行して99%がハーベスター原料となりました。近年は、農家の高齢化や労働力不足により、収穫面積も深刻な状況ですが、何れとしても2工場体制は未来永劫維持していきたいと考えています。地域や農家、関係機関が手を携えて今後もさとうきび産業の発展に御尽力下さいます様、切にお願い申し上げます。私も微力ではありますが、全力で取り組んで参りますので今後共、宜しく申し上げます。